様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：38001
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21730682
研究課題名（和文） 「雁パパ」から見る韓国の教育政策の現状と今後のあり方

研究課題名（英文） The Future Prospect of Foreign Language Education Policy in Korea

研究代表者
李 炫延（LEE HYUNJUNG）
沖縄国際大学・産業情報学部・准教授
研究者番号：50511169

研究成果の概要（和文）：近年、韓国では子どもを早期留学させるために家族が離れて暮らす「非同居家族」による、いわゆる「雁パパ」が出現している。「雁パパ」とは、母と子どもを留学させ、自分は一人韓国に残って留学費用を送金しながら暮らす父のことで、そこには様々な問題点も指摘されている。本研究は、早期留学によって現れた「雁パパ」現象に焦点をあてることで、韓国の外国語教育政策における現状問題と今後のあり方を探った。

研究成果の概要（英文）：Recently, the number of Korean students studying abroad at a young age has been increasing. This has led to an increase in separated families and the appearance of so-called “wild goose daddies.” This expression refers to fathers who stay in Korea in order to provide financial support for children studying abroad with their mothers. Educational researchers have discussed various problems with this arrangement. This paper, focusing on the phenomenon of “wild goose daddies,” which has resulted from having students study abroad at a young age, will examine some of the current problems with Korean foreign language education policy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：外国語教育政策、言語教育、英語教育、早期留学、韓国事情

１．研究開始当初の背景

（１）韓国では 1996 年より初等学校（日本の小学校）レベルでの英語教育の導入が始まっており、それに伴って早期留学の増加が現れた。

（２）早期留学によって現れた「雁パパ」は、社会的な問題の一つとして注目されている。

（３）「雁パパ」現象は、家族の非同居という面で様々なリスクを抱える問題があるにも関わらず、早期留学が増加傾向にある理由を教育政策的な面から明らかにすべきである。

２．研究の目的

韓国では、英語の早期教育と、それによる私的教育費の増加など、様々な教育環境における問題が、子どもの早期留学につながっており、「雁パパ」という非同居家族を出現させた。この「雁パパ」が新たな社会問題として指摘されている点に本研究は注目した。非同居家族として様々なリスクを抱えながらも早期留学を選択し「雁パパ」になる背景には、子どもの教育に対する如何なる親の意識が働いているのか、その意識は韓国の教育現実とどのような関わりがあるものかを究明し、今後の教育政策にどのように反映していくべきかを探ろうとしたのが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は、次のような量的研究と質的研究から成っている。

（１）量的研究

まず、本研究の入り口として、韓国の教育現実における問題を究明するため、量的調査データを収集し分析を行った。調査データは、韓国の大学生(予備調査 49 人､本調査 150 人)、および初等･中等教育の子女を持つ親(139 人)に対して行ったものである。質問紙を通して韓国の教育現実における意識を伺った調査データは、Microsoft Excel2007 で集計し分析した。結果、学校教育における英語教育の重要度だけでなく、激しい教育競争や私的教育費の問題、入試中心の教育など、教育現実における様々な問題を窺うことができた。

（２）質的研究

質的調査では、早期留学による「雁パパ」の登場について多角的な面から分析を行うため、雁パパを含む計 21 人に対するインタビューデータを収集した(うち､5 人は予備調査時のデータ)。それぞれのインタビューは録音の了承を得たうえで、半構造化インタビューで行われた。収集したインタビューデータは文字起こしをしたうえで和訳し、分析対象となる言及を抜粋､KJ 法と修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)を混合しながら項目分類を図った。当初は KJ 法だけによる分類を計画していたものの、当該現象を説明できる概念やカテゴリーを生成する面での補助として M-GTA による分析も一部加えた。分析の結果、大きく 6 つのカテゴリーに分かれた。そのカテゴリーはさらに上位概念として 23 概念に分かれ、そのなかの 4 つの上位概念からは全 20 の下位概念を分類し項目化することができた。

４．研究成果

（１）量的調査における結果

量的調査の結果から見られた、「雁パパが子どもを留学させる理由」に関する意見として、学生側と親側の上位 5 位までの結果を表すと次のようになる。

表 1. 大学生側の上位 5 の回答

1	英語の勉強のため
2	外国が教育環境の面で良いから
3	子どもの視野を広げるため
4	学校教育への不満と私的教育の依存
5	韓国の入試中心教育への不満

表 2. 親側の上位 5 の回答

1	英語の勉強のため
2	子どもの視野を広げるため
3	外国が教育環境の面で良いから
4	韓国の入試中心教育への不満
5	学校教育への不満と私的教育の依存

全 12 の選択肢から選んだ結果を見ると、大学生側も親側も若干順位の相違は見られるものの、上位 5 つの回答は一致している。また、1 位としては両方とも「英語の勉強のため」を挙げた。つまり、雁パパが子どもを早期留学させる理由は、「英語の勉強のため」が最も重要な目的ではあるものの、他にも様々な教育現実における問題が絡み合った結果からの選択であると一般の人たちも解釈していることが窺える。

入試中心教育で受験戦争の激しい韓国では、入試制度そのものが政権交代の度に改定される問題が指摘されている。入試制度の頻繁なる改変は、生徒と親側にとって不安と不満の声の元になっている。同時に、英語の早期教育によって親たちには私的教育費の更なる負担ももたらした。その負担に比べて、学校教育は満足できるものではないことと、受験戦争の激しい韓国社会から逃避し、より良い教育環境のなかで教育させたい、という親の意識が働いた結果が早期留学の増加につながっていることが量的調査から窺えた。

（２）質的研究における結果

質的研究の調査データは、雁パパ 12 人、子どもを留学させた経験のある母親 3 人、早

期留学の経験を持つ社会人 2 人、早期留学を考えたことがある大学生 4 人、計 21 人に対するインタビュー調査の結果である。分析結果、次のように 6 つのカテゴリーと、23 の上位概念に分けることができた。

表 3. 分析結果

カテゴリー		上位概念	
1	きっかけ	1	親の留学
		2	本人の希望
		3	親の転勤
		4	家庭の事情
	理由・目標	5	英語教育
		6	教育現実の問題
		7	外国の教育環境の良さ
		8	子どもの視野拡大
		9	留学経験者に有利な社会
		10	その他
3	雁パパとして	11	子どものためなら
		12	寂しい
		13	我慢
4	言語評価	14	制限的バイリンガル
		15	部分的バイリンガル
		16	完全バイリンガル
5	アイデンティティ	17	国家･民族的アイデンティティ
		18	家族観重視
		19	子どもに任せる
6	留学の結果	20	まだ分からない
		21	不適応→帰国
		22	適応→いずれは帰国
		23	適応→留学先で活躍

以下では、それぞれのカテゴリー別に見られた内容を述べる。

①きっかけ

早期留学を選択したきっかけとしては、「親の留学」「本人の希望」「親の転勤」「家庭の事情」という 4 つの概念に分かれたが、最も多く見られたのは「親の留学」である。雁パパインフォーマント 12 人の職業を見ると、図 1 のように大学教授が最も多いのが分かる。

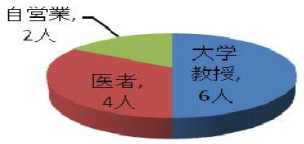

図 1. インフォーマントの職業

近年、寂しさだけでなく、経済的な問題や夫婦の不仲など、様々な原因から自殺に至る雁パパの問題がメディアを通して指摘され、雁パパ現象はより扱いにくい敏感な話題になっている。よって、雁パパからインフォーマントとして協力を得ることは大変厳しい状況があると言える。しかし、大学教授の場合は、学位取得のため自ら留学し、後で奥さんと子どもが現地に残ったケースが多い。そのため、わざわざ早期留学をさせたわけではない、いわゆる「自分たちは社会的問題になっている雁パパとは異なる立場」という意識が働き、インタビューに応じてくれるケースが割と多いことが考えられる。

②理由・目標

早期留学を選択した理由と目標に関しては、量的調査の結果からも見られたように「英語教育」に関する言及がどのインフォーマントからも窺えた。また、英語教育だけでなく、概念 6～概念 10 のように様々な理由と目標から早期留学を選択していることも分かった。特に、概念 6「教育現実の問題」はさらに次のような 8 つの下位概念として分類することができた。
「暗記･注入式教育」「激しい競争･友達も競争相手」「入試中心の教育」「大学だけが教育目標」「創意力の無い教育」「スペック作りの勉強」「私的教育費の負担」「加熱した教育熱社会」
以上から、如何に韓国の教育現実への不満が早期留学の増加を促している現状であるかが窺える。

③雁パパとして

雁パパになる背景には「子どものためなら」という意識が強く働いていることが窺えた。韓国の親たちは「子どものためなら親は犠牲になって当たり前」という意識を持っており、家族の生活も子どもの教育中心になっている傾向が強い。早期留学に伴う費用は生活費だけで 1 カ月平均 40 万円前後と高額であるにも関わらず、インフォーマントたちからは「経済的に支援ができるなら、それは当然行かせるべき」との言及が幾つも現れ、子どものためなら経済的な支援は惜しまない親の意識が窺えた。
一方、この「子どものためなら」の概念は

さらに、「父は金稼ぎの機械」「夫婦仲における問題」「家族観の変化」という下位概念が見られた。つまり、子どものために支援を惜しまない雁パパたちの意識とは裏腹に、子どもからは「父親は金稼ぎの機械」という認識をされたケースのインフォーマントも存在しており、寂しさだけでなく非同居による家族観の変化や夫婦仲の変化など、様々なリスクに直面しながらも子どものために我慢して支援を続ける雁パパの一面が窺えた。

④言語評価

早期留学の理由が必ずしも英語教育だけに限るものではなく、様々な教育現実に起因していることは前述した通りである。しかし、経済的な支出はもちろん家族非同居によるリスクを抱えながらも、早期から子どもを留学させる雁パパの期待としては、子どもの言語における「バイリンガル」は大きいものであると思われる。

調査データからは子どもへの言語評価として、「完全バイリンガル」「部分的バイリンガル」「制限的バイリンガル」の評価がそれぞれ現れたものの、「部分的バイリンガル」の評価が最も多く見られた。特に、インタビューの初期段階では「完全バイリンガル」である評価から、時間が経つにつれ評価が「部分的バイリンガル」に下がる例がよく見られた。つまり、両言語とも一定のレベルに達している面で「完全バイリンガル」であると評価はしたものの、インタビューの流れでどちらかに問題があることに気づいたり、日常では支障の無いレベルではあるが畏まった場での表現力は足りない部分があることに気づいたりする例が見られ、割と客観的に評価する様子が窺えた。なお、用いたバイリンガルの分類は小柳 2004 に基づいたものである。

⑤アイデンティティ

健全な思考を持つ人間形成においてアイデンティティ確立は大いに関係している。それが国家的アイデンティティであれ、個人あるいは文化的アイデンティティであれ、子どもにとってアイデンティティの混乱は自己を確立できない人間になる可能性もある。母親が留学に同行する雁パパの登場によって、一人留学の時代に比べると留学先で犯罪を起こす問題や不適応によるUターンなどは多少減ったと言われている。しかし、家族がわざわざ離れて住む形を選択する早期留学は、子どもにとっても親にとっても不安要素は多いはずである。言い換えると、離れて暮らしていても子どもが「家族」の概念や、韓国人としての国家的アイデンティティをしっかり持つことができる場合、親は「雁パパ」の決断について満足することにつながるのではないか。

インタビューでは、このような「雁パパ」の決断が間違いではなかったという結果になるために、子どもに対して韓国人としての意識や家族としての意識を常に強調しながら様々な努力をする親の姿が窺えた。概念 18 の「家族観重視」では 5 つの下位概念としての働きかけが見られた。例えば、家族としての結束と親子としての関係を再確認するための手段として、「電話」「メッセンジャー」「チャット」などを常に交わすことや、時間が許す限り「旅行」に出かけるなど、子どもへの持続的な関心が重要であると主張する親の姿が見られた。このような努力によって、子ども自らしっかり自己形成し、自分が進むべき道へ進んでいく姿が見られれば、「子どものためなら親は犠牲になって当たり前」と思って選択した雁パパの役割が間違いではなかったという安心につながるのが現実であると思われる。

⑥留学の結果

雁パパとして頑張った結果、子どもの留学は成功であったかどうかに関しては、カテゴリー6 で分かるように「まだ分からない」という評価、「不適応によって帰国しているので成功とは言えないか」のようなマイナス評価も見られた。ここで注目できるのは、概念 22 と 23 で示されているように、「適応しているがいずれは帰国させる」との評価と「適応しているから将来も留学先で活躍してほしい」という評価が半々現れた点である。これはデータ分析の流れで見ると、図 2 のように解釈・分類することができる。

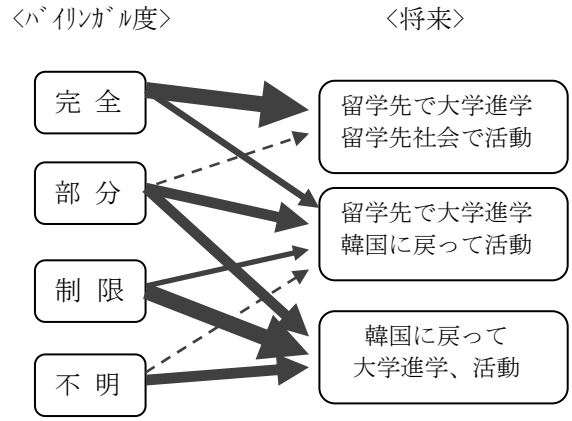

図 2. 言語評価と将来の相関

図の矢印の太さは親の希望度の強弱を示すものである。つまり、自分の子どもが完全バイリンガルであると評価する親であればあるほど韓国社会に戻らず留学先の社会で

活躍してほしいという意識が強く、制限的バイリンガルあるいは不明の評価の親であればあるほどいずれは帰国し韓国で大学進学の予定との言及が多かった。グローバル社会の人材として韓国の若者たちが世界で活躍できることに誇りを持つべきである反面、未来を背負っていく人材を輸出するばかりの国にならないかという懸念もある。

図２の客観性を示すために、より詳しく探るデータがあることが望ましい。しかし、この結果は親側が子どもの言語面だけを考えて下している評価であるとは限らず、いわゆる調査者からは導き出せない家族関係や家庭内の事情など、プライバシーに関わる面があると判断される。これは質的調査における限界とも言える点から今後の課題としたい。

⑦考察と示唆

以上、本研究における量的調査データと質的調査データの分析から見られた「早期留学と雁パパ」についてカテゴリー別に分けて考察結果を述べた。留学そのものが成功であったかそうでないかに関する判断は調査データから明白に推察することは容易ではない。しかし、カテゴリー3～6 にかけて全員のインフォーマントから窺えたのは、「良い教育環境で勉強させることができる（できた）点で満足している」という評価であった。つまり、早期留学の背景にある原因としては「英語教育」より、むしろ「韓国の教育現実から脱皮」のほうがより強く働いていることが考えられた。早期留学の現象は英語教育だけに起因しているという認識から脱皮すること、とりわけ外国語教育を含む教育全般の目標を改善し、教育現場においては良いプログラムを支援･拡大していくことで、公教育の位置を取り戻すことが韓国の教育現実における急務であると思われる。雁パパ以外のインフォーマント６人のなか、５人も「経済的な面さえ許されれば、将来私の子どもも留学させたい」という言及をしており、韓国の教育現実における問題が抜本的に見直されない限り、早期留学による雁パパ現象は今後も続くものと思われる。

もちろん政府側も早期留学の問題を改善しようと努力を注いできてはいるものの、その焦点が「英語教育」、特に初等教育の英語ばかりに向いている傾向が強い。それによって図３のように教育段階間の連携の無さと目標のズレが生じている。右の図３は、インフォーマント全員から指摘された英語教育の現状問題を図で示したものである。つまり、初等教育での英語は親しむものとしてのプログラム構成になっているものの、それが中学校・高校に上がるにつれ入試中心の内容と目標に変わってしまう、また大学になると就職のためのスペック作りの英語教育になってしまう現実を指している。英語に楽しむことができるプログラムが初等教育段階に沢山組み込まれていたとしても、それが中･高校につながらないことには意味が無い。それぞれの教育段階で目指す目標が相違し過ぎている現実は、その連携の余地も見当たらない。

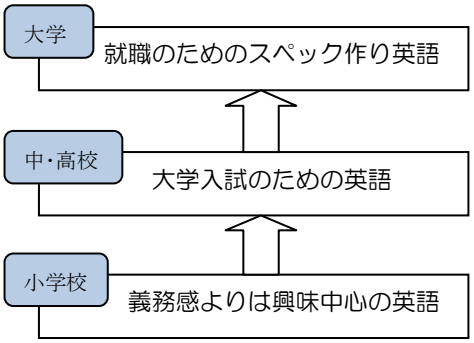

図３．教育段階による目標の変化

これは早期英語教育がスタートしつつある日本に対しても示唆する部分がある。上手に言語を駆使できる人が必ずしもグローバル人材であるとは言えないこと、外国語教育の目標が何であるべきかへの認識を改め、教育プログラムにおける教育段階間で連携を図ることが韓国だけでなく日本も今後の課題になると思われる。特に、日本はスタート時点にいるからこそ、行政と教育現場が協力し合って教育プログラムの編成と運営面で連携していかなければならない。私的教育の依存度が韓国ほど高くはない点を十分活かし、連携による学校教育の充実を図っていくことが、小学校で持った興味と学習動機を次のステップまで維持していく教育環境につながると思われる。

（３）まとめ

本研究は、量的･質的研究の両面から韓国の「早期留学と雁パパ現象」の背景には如何なる親の意識が存在しているのか、その意識は韓国の教育現実とどのような関わりがあるのかを究明することを試みてきた。量的･質的調査データの分析を通してある程度の理論的サンプリングはできたものの、まだ十分とは言えない。また、雁パパ現象は社会的な変化とともに今後も追っていく必要性があるテーマでもある。今後、より多角的に雁パパ現象を追っていくことで理論生成だけでなく、少しでも韓国の教育現実における改善や教育方法へのヒントを得るべきであると思われる。

なお、取り上げた雁パパの調査データは、

一定の職業に偏っている面もあり、分析結果もそれに左右されざるを得なかった可能性も考えられる点から、本研究で得られたデータ結果が必ずしも韓国の雁パパの現状を全て表すものではないことを断っておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 李炫姃、韓国の教育現実と早期留学、沖縄国際大学外国語研究、査読有、第 16 巻第１号、2012 年 9 月発行予定

〔学会発表〕（計２件）

① 李炫姃、韓国の英語教育政策と早期留学日本「アジア英語」学会、2011 年 12 月 10 日、椙山女学園大学

② 李炫姃、韓国における英語教育と政策、英語授業力開発研究会、2011 年 7 月 23 日、沖縄国際大学

６．研究組織

(1)研究代表者
李炫姃（LEE HYUNJUNG）
沖縄国際大学・産業情報学部・准教授
研究者番号：50511169

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし